

飽和した市場からの未来戦略 (2016年7月号)

～“航空機品質の電研社”を目指し～

(株)電研社は昭和25年の創立以来、情報通信ネットワークの構築と電力の安定供給のための電力通信用機材（おもにケーブルハンガー（写真参照）ラセンハンガー、スパイラルスリーブ）の製造・販売を行い、社会インフラや民生・産業機器の分野において社会貢献してきました。

創立50周年記念事業として平成12年に竣工した大阪市北区の本社ビルで、終わりなきチャレンジ精神を持つ野村社長に“飽和した市場からの未来戦略”をお伺いしました。



(株)電研社
代表取締役社長
野村 明宏 氏
(中央北支部)



ケーブルハンガー



会社視察中

●電研社とは

昭和25年に創立以来、インフラの整備が進む時代、電線の敷設には不可欠な資材を手掛け、順調に業績を伸ばしてきました。昭和52年には営業力を強化するために、東京営業所を開設。生産力を向上させるために、平成3年に津山中核工業団地内敷地に岡山工場を竣工。ケーブルハンガー自動組立機を新開発導入し、自動ラインを駆使した量産から、小ロット生産を可能にしました。迅速かつ正確な出荷を行うために、コンピュータ制御による自動立体倉庫を導入し在庫管理、物流管理体制を整えました。また、各種静的・動的荷重試験機、振動試験機、変形試験機、測定試験機、スコープ、実装柱電線路を取りそろえ、技術開発に努めてきました。

ところが、平成23年ごろには、光ケーブルの敷設がほぼ終了すると、需要が減り厳しい時代に入りました。ケーブルハンガーなどの資材は、耐久性に優れていて、消耗品としての買い替え需要もあまり望めませんでした。ケーブルの地下化という新しい需要もあると思われましたが、地下工事には地下工事のノウハウがあり参入が困難でした。

●新しい市場を目指して (海外編)

同友会の日中経済交流研究会の訪中団に参加したり、同業者とベトナムを訪問したりしました。訪問前は、ベトナムはまだまだインフラの整備が進んでおらず、魅力ある市場だと期待していたそうです。ただ、訪問してみると現地では電線を敷設しての有線ではなく、無線が主流になっていました。今までの自社製品をそのまま販売することは断念しなければなりません。ただ、現地でコーディネーターを務めたベトナム人は日本語が堪能で、彼らの潜在能力を感じました。そこで、製品の販売というハード面ではなく、長年蓄積してきた通信技術のソフト面の活用で、ベトナムの社会を下支えできるのではないかと考えています。

●新しい市場を目指して (国内編)

後継者難の東大阪の電線会社の経営を引き継ぎました。そこは岡山工場とは違う素材を使っていましたが、設備はよく似ていました。経営を引き継ぐことで、異なる素材でも対応ができるようになり自社の製品に幅を持たすことができました。

平成26年に東大阪にエンジニアリングセンター（EC）を開設し、開発環境の充実に努めています。開発に欠かせない線材加工の最新鋭設備機器を導入しました。この機械は、操作をする技術者のセンスが反映されるものです。そのために、技術者には自由な発想力で仕事をしてもらいたいと考えています。その日の仕事の内容や気分によってデスクを決めるフリーアドレス制を採用しているのも、技術者の自由な発想を開花させるためのものです。

●航空機品質の電研社を

野村社長は電研社に入社する前、横浜でFRP（繊維強化プラスチック）を素材として小型船舶などを製造する会社で、設計から製造までに関わっていました。当時「いつかCFRPを扱いたい」と思っていたそうです。そこで、平成26年にCFRP（炭素繊維プラスチック）の加工会社を電研社グループに迎えました。CFRPは軽量で強固。産業用機器で特に医療、航空機、宇宙分野での活用の可能性を秘めています。グループに迎えた当初は、CFRPの加工のみに特化していましたが、現在CFRPに対応できる金型を製造する機械を導入しました。そのことは、電研社のケーブルハンガーを生産するプラスチック押出成形の技術と相乗効果を生み出し、新しい事業領域の目となっています。

また、横浜時代のように、CFRPを設計から製造までを一貫でやりきる体制作りを進めています。CFRP素材のオリジナル製品は、電研社の技術開発のシンボルになるはずですが。今は、まだ自動2輪パーツ（写真）などに限られていますが、LCC（格安航空会社）の拡大に伴って発展する航空業界への参入を夢見ています。その第一段階としてJIS Q 9100（ISO 9001をベースに航空宇宙産業特有の要求事項を織り込んだ、日本で制定された世界標準の品質マネジメント規格）の取得をめざしています。聞けば、身長が低くてパイロットへの夢を断念した苦い思い出があるそうです。そんな野村社長は「現役を引退するころに、一品目でも航空業界に納品できれば」と言われます。この言葉の裏には「航空業界に一品目でも納品できるということは、その他の分野ではもっと大きな市場を獲得している」という意味です。野村社長の終わりなきチャレンジ精神で“航空機品質の電研社”を作り上げることで、飽和した市場からの脱却を果たし、新しい市場を開拓し続けることになるのだと感じました。

【経営理念：終わることのない当社の目的】

- 【1】 当社は、社会インフラ、民生・産業機器の分野においてお客様から感謝をいただける製品・サービスを提供することで豊かさを実感できる社会を下支えします。
- 【2】 当社は、雇用の維持と創出を目指し、より多くの仲間と互いに成長しあうことで活気ある社会と安心な暮らしに貢献します。

～取材を終えて～

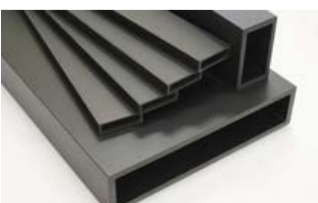
創業50年以上におよぶ歴史ある企業から、時代の変化に対応し、雇用の維持と創出を行ってきたということがわかり、多くのことを学び、気づきを得ることができました。

今回の取材では特に、野村さんの「技術開発を推進させ、企業力アップを実現する」という考えに感動いたしました。

「世界標準」「世界品質」と、世界と未来を見据えた経営戦略を取られている電研社は、たいへん素晴らしい企業だと感銘を受けました。

技術革新・文化革新が企業を大きく成長させることを、再確認できた取材でした。野村さん、ありがとうございました。

(取材/情報化・広報部 松永・大山)



CFRP加工例



CFRP加工例 釣具 (リールハンドル)



CFRP加工例
自動二輪パーツ (ホイール)

Profile

企業名：(株)電研社

所在地：大阪市北区西天満

設立：昭和25年

資本金：9,500万円

社員数：65名

事業内容：電力・通信用機材の製造、及び、販売